

奏



2014 SPRING Vol.41

公益財団法人 日本室内楽振興財団

第8回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
〈特集号〉

特別インタビュー

音楽は人と人の中にあるもので、室内楽がそれを一番顕著に表す。そして、室内楽の元にあるのは「お互いの音を聞き合う」ということ。

梅の花がちらほら咲き始め、春の到来が待ち遠しい二月下旬の午後。音楽評論家の日下部吉彦氏が兵庫県立芸術文化センターを訪れ、この春、大阪フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者となられた井上道義氏と、日本を代表するチエリストであり「大阪国際室内楽コンクール」審査委員長の堤剛氏に、それぞれ共通の恩師である齋藤秀雄氏のエピソードや室内楽に対する思いなどをお伺いしました。演奏会「ピカソと音楽」の前日ということで、リハーサル後の貴重なお時間をいただき、楽しくユニークな対談となりました。



左より井上さん、日下部さん、堤さん

兵庫県立芸術文化センター



てお風呂を炊くとか、紅茶好きの先生が数種の葉をブレンドして美味しい紅茶を作ってくださったりとか、ある意味、人生の楽しみ方のようなことも学ばせて頂いたと思つています。なので、音楽的なことを学んだのはもちろんですが、それ以外にも様々なことを学ばせて頂いた。そうした意味では、人生のトータルな先生だったと思つています。



井上さん

音楽界を世界レベルにまで引き上げたいという熱い思いを持つてらっしゃいました。レッスンは厳しい部分も多かったのですが、教え子たちと遊んでくださることも多かった。座布団取りとか銭回しなどのゲームも一緒にしてくださいることも珍しくなかったです。

日下部 齋藤先生という厳格な方という印象が強かったのですが、そんな楽しい部分もあったんですね。そうした面であまり知られてないのでは？



日下部さん

堤 特にオーケストラの合宿などでは、私たちの一員となつて過ごしてくださいました。北軽井沢にある齋藤先生の別荘で合宿をしたのですが、薪をくべ

日下部 そうなんです。井上さんはいかがですか？

井上 齋藤先生のお父様は英語の辞書を初めて作られた、いわば学者でした。そうしたアカ

齋藤先生の才能は、教育にあつたのではないかと思ひます。―― 井上

日下部 今日は音楽界の大御所であるお二人に、いろいろと質問させて頂きたいと思つております。どうぞよろしくお願ひします。早速ですが、お二人に共通するのは桐朋学園出身者ということですね。

堤 そうですね。特に齋藤秀雄先生の教え子ということが、大きな共通点だと思います。

日下部 齋藤先生は、いろいろな逸話が多いですが、実際にはどんな方なのでしょう？

堤 ものすごく熱心に音楽に打ち込む方で、なんとか日本の



堤さん

日下部 ピンセットで。それはすごい徹底ぶりですね(笑)。

井上 そんなちよつと変わった部分もありましたけど(笑)、やはり素晴らしい感覚を持つてらっしゃった。まだ若い四十歳の頃に、音楽学校を始めておられますからね。僕が四十歳の頃なんて、自分のことに必死で学校を創る気になつてならなかつたですよ。でも、齋藤先生の才能は、教育にあつたのではないかと思つています。ご自身、ヨーロッパで素晴らしいチエリストの先生に教わつた経験があつたようですが、それを自分だけに留まらせることを許さず、新しい才能を育成するために学校を始められたのだと思ひますね。

日下部 以前、齋藤先生が指揮するオーケストラを聞いたことがあるのですが、本番の途中で止められたことがあるんですよ。なぜ止めたかという、ピッチが狂っているからと。だからもう一度オーボエの「A」の音から始めるというんですね。演奏の途中にですよ(笑)。

井上 そういうことを構わず

PROFILE

敬称略

【日下部 吉彦】(インタビュー)

音楽評論家。1952年同志社大学英文科卒業。同年朝日新聞入社。58年朝日放送に転じ、音楽番組プロデューサー、解説委員を経て解説委員長を歴任。音楽評論の第一線で活躍中。大阪音楽大学客員教授。「大阪国際室内楽フェスタ」の審査委員長。

【堤 剛】

チェロ奏者。1942年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。齋藤秀雄氏に師事。61年に米インディアナ大学に留学、ヤーン・シュ・シュタルケル氏に師事。同年ミュンヘン国際コンクール第2位、カザルス国際コンクール第1位入賞。98年から06年までインディアナ大学教授、04年から13年まで桐朋学園大学長。07年9月サントリーホール館長。09年紫綬褒章受章。同年、天皇陛下御在位20年記念式典で御前演奏を行う。13年文化功労者。第8回「大阪国際室内楽コンクール」審査委員長。

【井上 道義】

指揮者。1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。齋藤秀雄氏に師事。71年グイド・カンテルリ指揮者コンクール優勝。98年フランス政府より芸術文化勲章「シュヴァリエ」を受賞。ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、京都市交響楽団音楽監督兼常任指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者を歴任。現在オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、石川県立音楽堂アーティスティック・アドバイザー。本年4月より大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者。

にやっちゃんいますからね(笑)。

曰下部 お客様もたくさんおられるのに、そこで「待った！」と止めるのですから、この方は厳しいだけじゃなく、違うものは許せないのだと感じました。

井上 状況がどうあれ、本当に良いものをしたかったのでしょうかね。

齋藤先生は音楽の正解を持つていて、それ以外は認めなかった。——井上

曰下部 それから、齋藤先生は注意事項を譜面に書くように指示されると聞きましたが……。

堤 そうですね。オーケストラの皆に書き込ませていましたね。

曰下部 色鉛筆だったとか？

堤 そうです。私の場合は幼い頃から習っていたので、すべて譜面に書いてくださいました。書き込みは増える一方なので、そのうち黒鉛筆だと、わからなくなるので、色鉛筆をお使いになるようになった。今回、井上さんの指揮の下、「ドンキホーテ」を演



えられたのかもしれませんが。それから、先程、井上さんのお話に齋藤先生が父親のようになるということがありました。それが幼い頃からご自身のお父様を尊敬していらしたからかもしれません。よく「私の父は、正則英語学校」という名の英語学校を創ったから、自分もそういう音楽学校を創りたい」とおっしゃっていたのです。すなわち「正しい音楽を教える学校だ」と。

曰下部 「正則音楽学校」ですか。正則だから、目を閉じて音楽を弾いた方が正しい音楽が演奏できるというわけですね(笑)。

井上 目を開けてくれないの

奏させて頂いているのですが、このパートにも先生の書き込みがあります。そのように書き込まれるのは、やはりこだわりの強さなのかもしれませんね。先

程、細かいことにごだわるといってお話がありました。が、こんなエピソードもあります。チェロのレッスンは先生の自宅です。ですが、到着は五分前でなければならなかった。早くても遅くてもダメで、きっちり五分前！

曰下部 時間厳守なんですかね。それもジャストじゃなく五分前というのが面白い(笑)。

堤 もし早く着いたら、寒くても暑くても外で待つわけです。それで、五分前になったら呼び鈴を鳴らす(笑)。

曰下部 一方、シユタルケル先生は絶対に譜面には書き込まないそうですね。

堤 そう。書き込もうとするのと「頭で覚えなさい」と書かせてもらえなかった。だから、シユタルケル先生に習うと、いつまでも譜面がまっさらなのです。

曰下部 どちらが良かったですか？

堤 どちらも素晴らしい先生

で、なかなかコミュニケーションが取れない時もあるんですよ。だから、たまには聞いてもらいたい(笑)。

曰下部 それぞれ自分のスタイルというものがあるのですね。

演奏者が室内楽の楽しさを伝えるような演奏をすれば、お客様もこちらを向く——曰下部

井上 齋藤先生は、オーケストラにも室内楽を教えるような方法で指導することがあります。きつと齋藤先生の教えの根幹には室内楽があつたのでしようね。ソリストですつとやってきた方や、指揮者でオーケストラをドライブするような方にはできない教え方だと思えます。「音楽は人と人の間にあるもの」で、室内楽がそれを二番顯著に表している。そうしたことをソリストにも教えていました。パツハのことを教えられた時、オーボエの音でと指導されたのですが、あの時代の日本にそんな指導をする音楽家は

いなかった。そこが素晴らしかった

で、どちらとも厳しかったです。

曰下部 井上さんは書き込ませられましたか？

井上 齋藤先生が初期に教えた方はそうなのですが、先生の教え方も徐々に変わったように、僕はそんなに書き込んだという印象はないですね。

曰下部 そうなんですか。

井上 それよりも、齋藤先生のイメージというのを壁に演じてらっしゃったということが強いんですね。父親は越えなくてはならない存在というように、先生は自ら父親となつて僕等の前に立ちほだかつてくださった。父親だから「こうでなければならぬ」と示すわけです。音楽の答えはひとつではないと思うのですが「ひとつだ」と言い切る。先生は「これでなくてはいいくない」という正解を持つていて、それ以外は認めないのですね。



反論すると「俺はお前に教えさせてもらつてるんじゃないから、他へ行け」と。「俺のやり方

と思います。先生は「演奏解釈」という言葉を使っていたのですが、演奏の根幹には「音楽は人と人の間にあるもの」ということがあり、それは室内楽にあると考えていたのでしょうかね。

曰下部 我々がやつている「大阪国際室内楽コンクール」は、日本中探してもそうないと思うのですが、どう思われますか？

堤 日本でも少ないですが、世界的にも室内楽コンクールはあまりないですね。

井上 そうですよ。

堤 この「大阪国際室内楽コンクール」の入賞者達は活躍していますし、これから室内楽をしたい方にとつて、素晴らしい登竜門だと思えますね。

曰下部 こうしたコンクールがもつと増えたら良いと思うのですが、せつかくこれに優勝しても、仕事として続ける方は少なく、その時だけという方々もおられます。これが非常に残念ですね。やはり室内楽は、仕事としては成り立ちにくいのでしょうか。

堤 確かに難しいのかもしれませんがね。そういう意味では室

で教えてるんだ！嫌なら辞めろ！」つて何度か言われましたね(笑)。そう言われながらも、なんとか乗り越えようと突き進みましたけど。

曰下部 堤さんにお伺いしたいのですが、チェロを弾く時は、いつも目を閉じておられますよね。先程の「ドンキホーテ」の練習中もそうでしたが、あれは齋藤先生の教えですか？

堤 いや、違いますね。

曰下部 自分のスタイルなのですか？

堤 そう言われれば、先生の教えだった気もするのですが(笑)。例えばブラームスのソナタを習つていても、ここはオーボエみたいな音で弾かなくてはならないとか、齋藤先生のとくは非常にわかりやすかったです。そのように教えてもらったことを、自分の中でさらにイメージして膨らませようとする、ついつい目を閉じてしまうのですよ。ということは、確かに教

室内楽は本当に好きでなければ続かないのかもしれませんが。

曰下部 そんな室内楽専門のコンクールが、大阪から生まれたというのはどう感じられますか？意外ですか？

井上 どこで生まれても意外です。室内楽ってコンクールにそぐわないと思います。室内楽って演奏者自身が楽しむものであつて、その良さをお客様に伝えるのは、至難の業だと思います。オーケストラだって、ハイドンやモーツァルトより、華やかでわかりやすい曲をやった方がお客様は入りやすい。でも、本当の音楽の喜びは室内楽の中に隠されていると思えます。なかなか気づきにくいとは思いますが、それをお客様にも伝えたいといけないうのです。それは演奏しないとわからないから……。

曰下部 演奏者がそうした室内楽の楽しさを伝えるように演奏すれば、お客様もこちらを向いてくれると思うのですがね。

井上 そうですね。問題は室内楽の演奏者が、自分達が楽

しんでお終いになってしまつていくことですね。それをお客様に伝えるには、良い意味で役者やタレントのやり方を学んだ方が良いと思いますね。

大阪は今までなかったものを生み出すエネルギーがある。

—— 日下部

日下部 井上さんは世界各国で活動されてきて、様々な街を見てこられたと思います。よくオーケストラがその街を代表するといわれたりしますが、この度、井上さんは、大阪フィルハーモニー交響楽団の指揮者となられますが、大阪の街についてはどのような印象をお持ちですか？

井上 これは、日本全体についても言えることですが、個性があるようで、ないように感じますね。大阪ならではの個性をもっとしっかり築いた方がいいと思う。外国で生まれた音楽を日本でするといのは、ある意味、新しい物を作ることであり、そうしたことは街づくりと一緒に手掛けなくてはならない

と思いますね。だから、大阪フィルハーモニー交響楽団を作ると、大阪の街を創っていくというのは、まったく同義語だと思っています。当然、室内楽コンクールを開催するというのも同義語だと思っています。

日下部 決して悪い意味ではなく、井上さんはとてもユニークなエネルギーの持ち主だと思うんですね。それで、その井上さんのエネルギーと大阪の街が一緒になつたらスゴイものができそうな気がします。

井上 そういうイメージは嬉しいですね。私自身大阪フィルハーモニー交響楽団に対して、良いイメージがあります。また、大阪には市や府が作ったホールはないし、企業という民間の方々が聞きたいという純粋な思いでサポートしてらっしゃることは、本当に素晴らしいと思います。ただ、大阪フィルハーモニー交響楽団を担当するに



と思います。 **日下部** だから、お二人のような本物のアーティストの方々が、進んでアウトリーチしてくださいと素晴らしいと思います。

室内楽の元にあるのは「お互いの音を聞き合う」ということ。 —— 堤

井上 僕は東京に住んでいるから、このコンクールの存在を知らなかった。多くのことが大阪から生まれているのだとしたら、そうしたことを知らせていかなくてはいけない。難しいとは思いますが…。

日下部 そうですね。これからはもっと積極的にメディアに対するアプローチをしなくてはならないと思っています。

堤 本音を言うのは非常に難しいことだと思つていますが、井上さんは非常に上手に本音をおっしゃる。このことには敬服します。そうしたことがさらっと言える井上さんは、関西をひっぱつていくリーダーにふさわしいと思いますね。積極的にリーダーシップを発揮してもらえ

あつて、今はまだ抽象的ではありませんが、イガグリを手にしたという感じなんです。

日下部 イガグリ…。

井上 食べたいけど持つと刺されそうで、開けるのが大変というような感じがあります。

日下部 でも、なんとか食べてやろうと…。

ら文化を発信しなければいけないと思つますし、大阪の街にはそういう人間の根源的な力強さがあるように感じています。私にとって大阪はとても面白いし、将来に賭けてみたいと思いますね。

日下部 確かに、大阪は今までなかったものを生み出すエネルギーがあると思うのですよ。この室内楽コンクールが大阪で芽生えたのもそういうことなのかもしれないですね。だからこそ、井上さんのようなエネルギーが必要だと思います。

井上 そうですかね。だと良いのですが(笑)。このコンクールについては、フェスタの部分がもう少し広がっていいば良いと思いますね。

日下部 ただ、フェスタばかりだとまた違う…。

井上 その通りですね。かじ取りが非常に難しいですね。あまりマスメディアにクラシックは載りにくいですから…。

日下部 だからこそ、お力を貸して頂けたら心強いのです。

井上 個人的には大阪フィルハーモニー交響楽団のメンバー

ば、いろいろなことが変わつてくるのじゃないかと期待します。それと、今、外国と日本のオーケストラを比較すると、プレイヤーの知識や技術面においては、もうさほど差はないと思うのですが、なぜ差を感じるかというと、室内楽の元にある「お互いの音を聞き合う」ということができていないのではないかと

思つています。指揮者がバランスの悪さなどを指摘する前に、管弦楽のセクションで互いに聞き合つて、自然に調整できるように



になれば良いと思うのです。例えば、外国のオーケストラの場合、歌手が歌っている場合、歌い手の声伸びるようバックアップすることが瞬時にできるし、おまけに管楽器の間で非常によくまとまる。ハーモニーとなる場合でも、指揮者がいちいち指示しなくてもできる。それは「お互いの音を聞き合う」ことが、ちゃんとできているからですね。

井上 その通りだと思います。

「お互いの音を聞き合う」というのは、本当に大切ですよ。それから、僕は大阪の人が非常に好きですね。これはお世辞ではなくて、人懐っこさというかあたたかさを感じるんですよ。

日下部 三大テノールとして有名なカレラスが、大阪の聴衆が一番好きだと言つていたんですよ。人間臭さというか、ヒューマンリレーションが特に素晴らしいと。

井上 そうですね。もともと人懐っこいという特性があるので、「お互いの音を聞き合う」というコミュニケーション的な部分は大阪の人は得意なのかもしれないですよ。

日下部 そうした良い部分を、井上さんのお力で十二分に引き出して頂けたら、大阪フィルハーモニー交響楽団をはじめ、大阪の街も変わつていくように思います。今日の対談は、お二人のいろいろなお考えやエピソードをお聞かせ頂いて、非常にユニークな楽しいものとなりました。ありがとうございました。

音楽文化をよささえる

住友生命保険相互会社

CSR推進室

室長

濱本

信樹

住友生命相互保険会社は一九九〇年(平成二年)に周年記念事業の一環として「音楽による社会貢献」を掲げ、クラシック音楽専用の「いずみホール」が誕生しました。ウィーンの楽友協会大ホールに範を求めたホールでは良質のコンサートが開催され、クラシック音楽の普及・発展への貢献と大阪から世界に向けて音楽文化を発信し続けることを目指しています。更に、大阪のみならず、全国各地で展開するコンサート活動に加えて子育て支援や地球環境保護などの極めて今日的なテーマをベースにした社会貢献活動にも熱い目を注いでいます。

今回はこれらの広範な活動について同社CSR推進室室長の濱本信樹氏に筆を執っていただきました。



オーケストラを前に、満面の笑みでタクトを振る人。指揮台の足元に静かに伏せているのは、頼もしい盲導犬。これは、大阪城近くの「いずみホール」で毎年開催される「夢コンサート」の

人気企画、指揮者体験コーナーの光景です。日ごろコンサートにお越しただく機会が少ない、身体に障がいを持つ方々を招待して二〇〇三年から毎年行っています。



いずみホール

このコンサートの第二回目、私は来場者が行き交うロビーで盲導犬を数えていました。全国で千頭程度しかない盲導犬が十数頭も集まって、ユー

ザーの方と一緒に演奏を聴く姿に感動し、会場の和やかな雰囲気、音楽は最高のプレゼントだと感じました。

「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」(公益財団法人日本室内楽振興財団主催)の会場としてもおなじみの「いずみホール」はクラシック音楽専用ホールです。住友生命の周年記念事業の一環として、音楽による社会貢献を目的に一九九〇年にオープンしました。現在は一般財団法人住友生命福祉文化財団が運営しています。理想の音

場を演出するウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地「ウィーン楽友協会大ホール」に求めた、シューボックス型の中規模ホールで、天井や壁のデザインをはじめ、床、椅子、八基のシャンデリアなど、緻密に計算された音響効果により「楽器の集合体」に包み込まれるような空間を実現しています。残響時間はクラシックの室内楽にふさわしい一・八秒〜二秒。「演奏家も聴衆ももう一度来たくなるホール」というコンセプトで運営しています。

いずみホールオープン当初、私は担当部門の若手職員として運営を手伝ったことがありますが、緊張しながらもコンサートの雰囲気を楽しみ、クラシック

ク音楽の普及に会社に関わることを誇りに思ったものです。

オープンから二十四年。ホールはクラシック音楽の普及・発展への貢献と、大阪から世界へ音楽文化を発信し続けることを目指しています。独自の企画として年間約三十公演の主催公演も開催し、現代音楽をメインに演奏するレジデント(座付)・オーケストラ「いずみシンフォニエッタ大阪」や、昼間に気軽に楽しめる「ランチタイムコンサート」など、ユニークな企画と高い主催公演は常に高い評価を受けています。近年は、主催公演の一定席数を若者に無料提供するユースシートの設置や、大阪市音楽団と提携した音楽鑑賞会に年間約五千人の小学

【プロフィール】

1985年 慶応義塾大学商学部卒
同 年 住友生命保険相互会社入社
大阪広報センター長、三重支社北勢営業部長、総務室長を経て
2011年 CSR推進室室長。現在に至る。



全国縦断チャリティコンサート

生が来場するなど、若年層のクラシック音楽ファンづくりに向けた取り組みも行っています。

一方、全国各地に住友生命からクラシック音楽をお届けしようとして、一九八六年に始まったのが「全国縦断チャリティコンサート」。毎年国内外の一流アーティストによる演奏を全国のお客さま

まにお楽しみいただいています。今年で二十九回目を迎え、これまでの通算公演回数は九八五回、二二万名以上の方々にご来場いただいています。(二〇一四年七月末現在)

会場でご協力いただいたチャリティ募金は累計三億円を超え、各地の福祉事業等へ寄付されています。タイやベトナムの学校舎の建設、東日本大震災の被災地への義援金・支援金としても役立てられ、現在は、募金の一部で東日本大震災の被災地の学校へピアノを寄贈するプロジェクトを実施しています。また、当社は、二〇〇八年か

ら全国の病院・高齢者施設等で行っている大野和士氏の「こころふれあいコンサート」に協賛しています。これは、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者である大野氏が、コンサート会場に行くことが難しい方々にも、音楽に親しむ機会を提供したいという想いから開催されているボランティアコンサートです。二〇二年度からは東日本大震災の被災地の病院等においても開催しています。

て手軽に音楽に接することができる時代でも、奏者が演奏する空間に身をおくことは格別であり、どのような状況にある人にも良い時間であるということと、また音楽の持つ力の大きさを教えてもらった気がします。当社は音楽以外にも様々な社会貢献活動を行っています。がんや認知症など健康に関する分野への支援の他に、現在、子育て支援にも力を入れて取り組んでおり、「未来を強くする子育てプロジェクト」として、子育て支援活動をしている団体の表彰や、女性研究者への支援を行っています。

このような事業を通じて、様々な人が音楽で癒される様子を体感する機会を得ました。病院コンサートではマエストロが贈る音楽に、震災支援コンサートではイルカさんの歌声に、入院患者の方々、被災された方々が穏やかに晴れやかな表情をされるのを間近に見せていただきました。一流の音楽、とりわけ「生の演奏」は人の心を動かすものだということを実感しています。様々な媒体を通じ

また、地球環境保護の取組みとして、石垣島やフィジーのサンゴ礁を守る「サンゴ礁保全プロジェクト」や、環境保全をテーマとした職員のボランティアも行っていきます。当社では、職員が活動するボランティアを「スマイリー・ヒューマニー活動」と呼んで全国各地の職場で多様な取組みを展開しています。ヒューマニーとは当社の



サンゴ礁保全プロジェクト ©WWFジャパン

音楽もまた目に見えるものではなく、音が「楽しく強く生きる」ために不可欠なもの。嬉しい時、辛い時、人生の節目のセレモニーで、音楽に心動かされ、励まされた経験を多くの方がもっているかと思えます。

長い間、人々に親しまれているクラシック音楽のように。これからも当社は生命保険業と社会貢献活動等を通じて、豊かな社会づくりに貢献していきます。



音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール
一九八〇年京都府生まれ。大阪大学文学部卒業。同大学院修士（文学博士）、リット音楽院（ハルバーク）などに留学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトーク」(中公新書、一九九七年)で吉田秀和賞、「中東欧東部の回廊」(岩波書店、二〇〇九年)でサントリー学芸賞を受賞。「バルトークの民族音楽編曲」(大阪大学出版会、二〇二二年)がある。

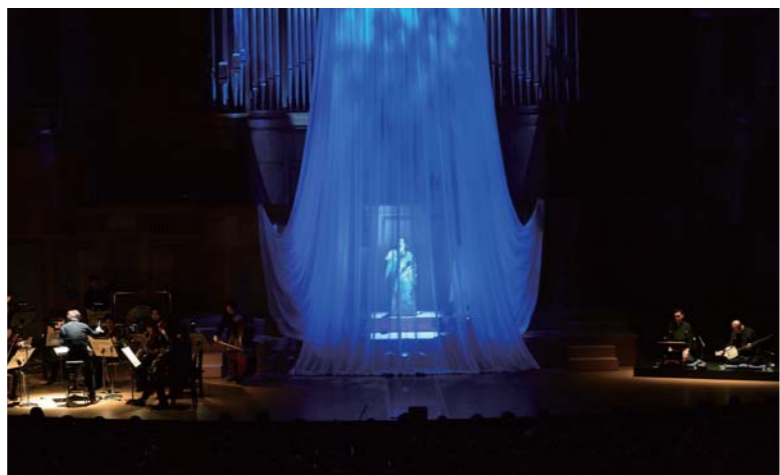
「三井の晩鐘」と琵琶法師

「三井の晩鐘」が、初演から約十年を経て、先日いずみホールで再演された(二月三十一日)。初演に際して、少し関わりがあったので、印象深い。

まずあらすじを簡単に紹介しておこう。竜の女と結婚した男がおり、子供が生まれ、女は竜の世界に戻ったが、子供が泣き止まず、困った父親が湖の端で母に訴える。すると、湖から母である竜が現れ、その子供のために自分の目玉を与え、子供は母の目玉をしゃぶるとおとなしくなった。しかしその目玉もしゃぶりにくくしてしまふと子供はまた泣き止まなくなる。男は困つてまた湖に來ると、再び竜が現れ、もう一方の目も子供に与え、もう自分では子供の様子を見ることができなくなったので、良

い日であったなら、湖のほとりの鐘について知らせてほしい、と言ひ残して湖底に消えてゆく、といった筋書きである。

舞台化に至るまでに、なかなか複雑な来歴をもった作品なので、少し整理してみよう。まず最初に三井寺の鐘にまつわる、さきのあらすじに準じる民話があった。そしてこの民話に触発された三橋節子さんの画業。彼女は、がんで利き腕を切除したあと、左手で絵を描き続けたという画家であり「三井の晩鐘」というタイトルの作品もある。さらにその三橋さんの仕事に傾倒された梅原猛さんの「三井の晩鐘」という絵本があった。この絵本を元に、イシハラホールのプロデューサー戸祭鳳子さんが、梅原さんに委嘱し、その絵本とは別に音楽劇のための原作を作つてい



「三井の晩鐘」の舞台、猿谷紀郎指揮いずみシンフォニエッタ大阪(左)、竜の女、天羽明恵(中)、そして豊竹昌勢大夫(浄瑠璃)と鶴沢清治(三味線)。1月31日、いずみホール、写真磯川智昭

基底にあるのは、琵琶法師によつて語られてきた物語の本質が鎮魂にある、という見方である。「大地の豊穰をつかさどる地神は、タブーを犯せばはげしくたたる神でもある。それは豊穰と死(破壊)、エロスとタナトスを両義的につかさどる人格だが、地神のこの両義性が、一方では、母なる大地の女神(堅牢地神)として表象され、他方では、霊威はげしい五郎(御霊)の若宮として表象されることになる。」

つまり、平家物語であれば、壇ノ浦に沈んだ幼帝安德の御霊とその母建礼門院の鎮魂こそが、両義的な地神の、その両面に対応する。

この大地の女神は、やがて水の神(つまり蛇または竜)と重なつてゆく。大地と水があつて、はじめて自然の豊穰な恵みをもたらされるからである。だとすれば、「三井の晩鐘」にお

ける、湖からやつてきて湖に帰る竜の女とはまさしく母なる水土の神であり、そして泣き止まない子は荒ぶる御霊であつて、この素朴な民話が平家物語よりも古い語り物の正統に則つていることがわかる。

そして「目」「盲目」というテーマ。ここは微妙な議論なので、兵藤さんの言葉をそのまま引用しよう。琵琶法師の多くは盲人だった。

る。その上で、石川耕士さんが、浄瑠璃の様式を念頭に台本化され、その台本をもとに鶴沢清治さんが浄瑠璃部分作曲した。さらにその浄瑠璃部分を取り囲むようにソプラノと小編成のアンサンブルのための音楽が猿谷紀郎さんの手によつて書かれ、初演のバージョンが仕上げられた。この上演は高く評価され、冒険的な音楽公演に与えられる佐治敬三賞(サントリー音楽財団)を受賞した。今回は岩田達宗さんの演出による上演。やはり心の深いところに眠るものと呼び覚ます言葉と音楽だ、と今回の舞台を見ても思った。

ろである。このイメージは、どこか論理を超えた生々しさがあり、それがこの物語の印象を強くしている。どうして子供は泣き止まないのか。どうして母はその子をなぐさめるために、自分の目を与えねばならないのか。どうして竜の女は盲目とならねばならないのか。

初演の時にはまだ出版されていないのだが、その後、兵藤裕己さんの『琵琶法師…(異界)を語る人びと』(岩波新書)を読んで、(直接「三井の晩鐘」について書かれているわけではないのに)先のような疑問について答えてくれる驚くべき議論が展開されていて強く印象づけられた。おそらく誰も触れていないと思うので、ここで少し論じてみたい。

そもそも兵藤さんの議論の

「聴覚と皮膚感覚によつて世界を体験する盲目のかれらは、自己の統一的イメージを視覚的に(つまり鏡にうつる像として)もたないという点で、自己の輪郭や主体のありようにおいて常人とは異なるだろう。それはシャーマニクな資質のもちぬしに、盲人が多いこと理由でもある。そして自己の輪郭を容易に変化させようかれらは、前近代の社会にあつては、物語、語り物伝承の主要な担い手でもあつた。」モノ語り

らせる、という話になつたのだろう、と筆者は考える。

舞台作品としての「三井の晩鐘」は、この物語を浄瑠璃の様式で三味線の伴奏で太夫が語り、登場人物である「竜の女」にはソプラノが配され、室内アンサンブルがそれを支える。この物語が、先に述べたように日本の語り物の古層に属するものだとすれば、それが太夫によつて語られるのは全く理に適っている。これを構想した戸祭さんの直観は正しかったと思う。そして石川耕士さんの詞章も、鶴沢さんのフシも、あえて古典を模倣し、古くから伝わる作品のように書かれている。

これはもちろん「物語」の外にあつて、それを語る者についての話だ。だから「三井の晩鐘」における、物語の内側の「盲目」というモチーフを、そのままこの議論の延長で語るわけにはいかない。おそらく盲目の語り部という物語の外枠に位置していたモチーフが、奇妙なねじれを起こし、物語の内側へと転化して目玉をしゃぶ

そして作曲の猿谷さんは、その浄瑠璃部分の周りにとても慎重に控え目な音を配した。人間の世界を離れて竜の女となつたソプラノは、「聞かせ」という言葉を、子音抜きのヴォカリーズとして「I-a-e」と歌う。その発想も秀逸だ。今回の再演にとどまらず、長い命を持つ作品となっていくのではないかと思う。

変化し続けるコンクール

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

「ボルドー弦楽四重奏コンクール2013」



ボルドー大会の舞台は、前回までのオペラ劇場からオープンしたばかりの音楽ホールに移った。

昨年五月六日から十一日、フランスはボルドーで国際弦楽四重奏コンクールが開催された。世界的なワインの生産地として知られるこの街での開催は七度目だが、前身たるエヴィアン大会から数えればもう三十年を越える歴史を誇るフランス最大の室内楽専門コンクールである。九月のミュンヘンでのピアノ三重奏部門の速報を挟んだため結果は些か旧聞となった感も否めないが、コンクール運営という視点では大阪も学ぶべきところが多々あるこの大会、あらためて振り返ってみよう。

◆審査員構成の激変

エヴィアン市の予算方針変更で拠点を失った弦楽四重奏コンクールが一九九九年にボルドーに移つて以来、この大会は監督を務めるチェロ奏者アラン・ムニエの考えに拠つて運営されて来た。世にある主要な弦楽四重奏コンクールの中でも、これほど監督のキャラクターが明快に反映された大会は、故メヌーインの個人大会のような感もあった二十世紀末までのロンドン国際弦楽四重奏コンクールを除き、他になかろう。

これまでのボルドーの大会としての最大の特徴のひとつは、その審査員選択にあった。第二

回のアメリカーン弦楽四重奏団（以下Q）から前回のブラジャークQまで、審査員には現役の常設弦楽四重奏団四名が含まれるのが常だったのである。審査員団は七名程度で、ムニエ監督は審査は行わないので、弦楽四重奏の演奏の在り方や美学に関してはずきりしたひとつの方向性を持った四人が、既に審査員団の過半数を占めていたのだ。実質上、「今回はこの団体に審査を任せます」に近いことになるのは誰の目にも明らかであろう。

無難、ムニエ監督もそんなことが判らぬわけでもない、それはそれで良いと決断した上での

人選だった筈だ。つまりこの大会、弦楽四重奏演奏には様々な価値判断があり得るといふ事実を真っ正面から認め、それを逆手に取った（開き直った、とすら言えよう）審査方法を敢えて採用したのである。

無論、特定弦楽四重奏団が下す判断が偏つたものになる危険性はある。筆者の知る限り、初回はエヴィアン時代から行われていた「批評家審査員」というシステムが並置されており、「ストラッド」誌の評論家でウィオラ音楽に詳しいタリー・ポッター氏や、モーツァルトの権威海老沢敏氏が招聘されていた。ファイナリストの選択では批評家チームの意向も反映されたと聞いている。回を重ね、この批評家審査員制度が廃止されたのも、監督の判断であろう。

バーの顔ぶれを眺めてみよう。まずはヴァイオリニストから。アメリカ代表はシルヴィア・ローゼンバーク。ガラム・アン門下でシモン・ゴールドベルクにも学び、二〇〇七年からジュリアード音楽院で教え、世界主要音楽院や音楽祭でのマスタークラスも多い。ロシアからはパウエル・ウエルニコフ。チャイコフスキー・ピアノトリオのメンバーとしての活動が長く、複数の室内楽音楽祭の監督も務める。地元フランス代表はシルヴィエ・エ・ガゾーとギョーム・シユートル。前者は後述のイヴァルディヤムニエと共にピアノ四重奏の活動を行っている。後者は去る一月に解散したイザイQの第一ヴァイオリンを十九年間続けた重鎮だ。

ヴァイオラは巨匠ハット・バイエルレ。誰もが知るアルバン・ベルクQの創設メンバーであり、現在はヨーロッパ室内楽アカデミーの中心人物でもある。教育者として日本にも頻りに訪れているピアノのクリスティアン・イヴァル

く、「チェロソナタがとても名曲なのです。でも誰も弾かない。確かに音楽史的にはマニヤールは重要とされていないかもしれませんが、その弦楽四重奏も確かに纏めにくい難曲です。でもこの大会を通して、若い奏者にこの偉大なフランス作曲家を知っていただきたいかった。」（ムニエ）

第二回となったエリプスQは、フランス国立管弦楽団のメンバー。シューマンQを含めどの団体もなんとか格好を付けるのに「破綻のない演奏」を越えた成果を挙げ特別賞に輝いた。ある意味、この楽譜のみに賭けて一点突破を狙った作戦が成功したともいえよう。オーケストラ団員による団体なので、この先の安定した活動が心配だったが、今年一月のパリのクアルテット・ピエンナレで開催された若手オーディションの舞台上で、演奏していたので、団体として



優勝したシューマンQ。ヴィオラが大阪のときとは異なっている。

弾いたことがない上に、作品として纏めるのが猛烈に困難な楽譜が課題とされているのだ。こんな課題曲を出した途端に、参加者の数が激減するのは目に見えている。

選課題曲もあつてか、圧倒的にフランス大会の感が強かったことは事実である。

そんな中で、優勝は圧倒的な地力の違いを見せたシューマンQ。前回大阪での第二回以降、ヴァイオラ奏者が日本人からドイツ人に交代しつても活動は順調で、今やドイツを代表する期待の若手団体としてヨーロッパ音楽会で認知を受けつつあるの



会場隣のカフェでソレイユQに講評を行うバイエルレ氏。

◆「マニヤールを課題曲にする意味は

今回のボルドー大会では、もうひとつ興味深い要素が課題曲にあつた。本選で必ず弾くことを求められた作品が、マニヤールの弦楽四重奏曲だったのだ。要項を眺めた世界中の若い弦楽四重奏奏者が腰を抜かしたろう。

一般的に言って、アンサンブルの

コンクールの最中、審査員や裏方、参加者らの間で忙しうに立ち回るムニエ監督を無理矢理捉まえ、なぜマニヤールを課題にしたのか尋ねた。ムニエ氏曰

「マニヤールはステイジが進むにつれて演奏そのものの精度は落ちるのが常である。予選を突破せねば弾く可能性がない演目に用いる台奏練習時間は、必然的に少なくならざるを得ないからだ。独奏コンクールなら、本選演目は参加者が学生時代から弾き込んだ有名曲になるので、参加者も慣れた楽譜である。だがアンサンブルの大会では、どの曲も猛烈な練習せねばならない。そこにもつてきて、本選では誰も弾いたことがない上に、作品として纏めるのが猛烈に困難な楽譜が課題とされているのだ。こんな課題曲を出した途端に、参加者の数が激減するのは目に見えている。」

「マニヤールを課題曲にする意味は、今回のボルドー大会では、もうひとつ興味深い要素が課題曲にあつた。本選で必ず弾くことを求められた作品が、マニヤールの弦楽四重奏曲だったのだ。要項を眺めた世界中の若い弦楽四重奏奏者が腰を抜かしたろう。」

コンクール審査委員



堤 剛

委員長 日本/チェロ

桐朋学園の音楽教室の時から齋藤秀雄氏に師事。1961年アメリカに留学し、ヤーン・シュタルケル氏に師事。1963年ミュンヘン国際音楽コンクールで第2位、同年ブタペストでのカザルス国際音楽コンクールで優勝。1988年より2006年までインディアナ大学教授。2013年文化功労者に選出。サントリーホール館長。



ライナー・シュミット

ドイツ/ヴァイオリン

実力・人気ともに世界最高の弦楽四重奏団(以下、Qと略)として評価の高いハーゲンQの第2ヴァイオリン奏者。シンシナティ音楽院でラサールQのワルター・レヴィン氏と出会い、室内楽に目覚める。1987年ハーゲンQに加わり、世界各国で演奏活動を続けている。パーゼル市音楽アカデミー教授。



マーティン・ビーヴァー

カナダ/ヴァイオリン

世界的な名声を博した東京Qの第1ヴァイオリン奏者。2002年に同Qに加入し、昨年の解散までの11年間世界各地で演奏し、北米、ヨーロッパにて数々の賞を受賞。インディアナ大学でジョゼフ・ギンゴールド氏に師事。1991年モントリオール国際音楽コンクールで優勝。現在、コルバーン音楽学校教授。



藤原 浜雄

日本/ヴァイオリン

1968年のバガニーニ国際ヴァイオリンコンクールで第2位、1971年のエリザベト王妃国際音楽コンクールで第3位に入賞し、国際デビューを果たす。アメリカで、ソロ・室内楽などで活躍。1992年に帰国し、2012年3月まで読売日本交響楽団の首席ソロ・コンサートマスターを務める。桐朋学園大学院大学教授。



川本 嘉子

日本/ヴィオラ

今、様々な音楽シーンで最も登場するヴィオラ奏者。ヴァイオリンを江藤俊哉各氏に師事。1989年第6回東京国際コンクール室内楽部門で優勝。1991年ヴィオラに転向。1992年ジュネーヴ国際コンクール・ヴィオラ部門で最高位を受賞。現在ではソリスト・室内楽奏者として活動している。



ジェイムズ・ダナム

アメリカ/ヴィオラ

国際ヴィオラ大会での代表ソリストを務める等、米国を代表するヴィオラ奏者。セコイアQの創設メンバーとして活動。その後、1987年から1995年の間、米国で最も著名な弦楽四重奏団クレーヴランドQのメンバーとして活動する。その優れた演奏活動に対して1996年にグラミー賞を受賞。ライス音楽大学教授。



アルト・ノラス

フィンランド/チェロ

5歳でチェロを習い始め、パリ音楽院でポール・トルトゥリエ氏に師事。1966年、チャイコフスキー国際コンクールで2位入賞。その後、世界中の主要なオーケストラや指揮者と共演。また、シベリウス・アカデミーで長年教鞭を取る。ナントリ音楽祭、パワロ国際チェロコンクールの創始者で、現在は芸術監督。



梅本 俊和

日本/ピアノ

アンサンブルを得意とする日本を代表とするピアニスト。ピアノのソロはもとより、室内楽奏者として幅広く演奏活動を行っている。近年は、各種オーディション、国際コンクールの審査委員として招かれている。マスタークラスで後進の指導にもあたる。1967年、1977年に大阪文化祭賞を受賞。日本演奏連盟常任理事。



パスカル・ロジエ

フランス/ピアノ

ドビュッシーやラヴェル等のフランス音楽を得意とする世界的なピアニスト。11歳の時にオーケストラ・デビュー。パリ音楽院を首席卒業。17歳にして名門デッカと専属契約を結び、多数の名盤をリリース。1971年、ロン＝ティボー国際コンクールで優勝し、それ以降国際舞台での活動を続けている。

第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」

「大阪国際室内楽コンクール」は、室内楽に取り組む優秀な音楽家を広く世界に求め、優れた演奏を顕彰し、人材を育成するものです。第8回コンクールは、第1部門(弦楽四重奏)と第2部門(ピアノ三重奏・ピアノ四重奏)に分けて実施いたしますが、室内楽を振興するだけでなく音楽を通じて真の国際交流を目指し、3年毎に開催するものです。今回は、世界18カ国から68団体の応募があり、予備審査の結果9カ国から21団体が参加し、腕を競い合います。尚、日本の作曲家による室内楽の名曲を本選に加えていますので、ベートーヴェンやシューベルトの古典と併せてご堪能いただけます。

コンクールと同時開催する「大阪国際室内楽フェスタ」は、年齢制限や課題曲のないコンクールで、演奏曲や楽器の種類は自由としています。このため西洋のクラシック音楽はもとより、世界各国の伝統音楽・民族音楽のアンサンブル(2名~6名)も対象としています。またフェスタの審査は、聴衆の中から委嘱された一般審査員(100名)によって行われ、従来のコンクールには見られないユニークなものとしており、国際的に広く知られています。今回は、世界24カ国から103団体の応募があり、予備審査の結果10カ国から21団体が参加します。室内楽の祭典を心ゆくまでお楽しみ下さい。

開催記者発表

第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催記者発表が3月24日(月)ホテルニューオータニ大阪で行われました。当日は、関西及び東京の新聞・音楽雑誌記者33名が出席しました。主催者側からは、秋山喜久会長、越智常雄理事長、堤剛氏(コンクール審査委員長)、日下部吉彦氏(フェスタ審査委員長)、吉江安生常務理事(運営委員長)が出席し、概要説明と質疑応答を行いました。



堤審査委員長は、「音楽の原点と言われる室内楽を対象としたこのコンクールですが、世界の音楽界に占める地位が回を重ねる毎に大きくなっていくと感じています」とコンクールの成功に自信を見せられました。また日下部フェスタ審査委員長は、「年齢や性別、演奏曲目等の制限のないフェスタは室内楽を振興する

格好の音楽祭です。世界で第一級のコンクールになるために、フェスタが求心力の中心になるでしょう」と挨拶されました。

冒頭、挨拶に立たれた秋山会長は、「今回も171団体という多数の応募の中から14カ国42団体のハイレベルの参加団体を選ぶことができました。世界一を競う音楽祭となることを期待しています」と抱負を語られました。

その後、出席された記者との活発な質疑応答があり、世界で当コンクール&フェスタの知名度も着実に上がっていることが実感でき、第8回大会への期待の大きさが感じられる記者発表となりました。

開催要項

- 期間** 2014年5月13日(火)~5月22日(木)の10日間
- 会場** いずみホール
サントリーホール・ブルーローズ(22日(木))
- 部門**
 - 第1部門 弦楽四重奏
 - 第2部門 ピアノ三重奏・ピアノ四重奏
 - フェスタ部門 年齢制限や課題曲のないコンクールで、楽器の種類は自由

◎後援・協賛団体

- 後援** 外務省、文化庁、大阪府、大阪市、関西経済連合会、日本演奏連盟、いずみホール、OBP開発協議会、読売新聞社
- 協賛** アサヒグループホールディングス、イオン、岩谷産業、大阪ガス、大林組、鹿島建設、三機工業、サントリーホールディングス、住友生命、ダイキン工業、東芝、日本たばこ産業、ハウス食品グループ、非破壊検査、JR西日本
- 協力** 日本航空
- 賛助** 読売テレビ
- 主催** (公財)日本室内楽振興財団

◎日程別演奏時間帯

日時	演奏部門
5月13日(火) 9:30~21:00の予定	第1部門・1次予選
14日(水) 9:30~22:00の予定	第2部門・1次予選
15日(木) 11:00~20:00の予定	第1部門・2次予選
16日(金) 11:00~20:00の予定	第2部門・2次予選
17日(土) 11:00~18:30の予定	フェスタ・予選(A)
18日(日) 11:00~18:00の予定	フェスタ・予選(B)
19日(月) 11:00~20:30の予定	第1・第2部門・本選
11:00~16:30の予定	フェスタ・本選
20日(火) 16:30~17:30の予定	作曲家 西村朗氏の特別講演「室内楽の魅力」
17:30~18:30の予定	表彰式
14:00~16:30の予定	披露演奏会 第1部
21日(水) 19:00~21:20の予定	披露演奏会 第2部
以上、会場はいずみホール	
22日(木) 19:00~21:00の予定	披露演奏会(東京)
会場はサントリーホール・ブルーローズ	

第8回 「大阪国際室内楽コンクール」 出場グループ

第8回「大阪国際室内楽コンクール」に、世界18カ国から68団体の応募があり事前審査の結果9カ国から21団体が参加し、腕を競い合います。

第1部門《弦楽四重奏》(10団体)



アダマス・カルテット
(オーストリア)



アベル・ストリング・カルテット
(ドイツ)



アルカディア・カルテット
(ルーマニア)



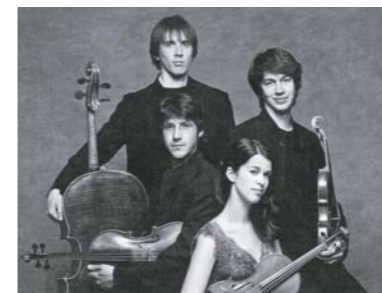
ヴァスムート・カルテット
(アメリカ)



ヴァン・カイック・カルテット
(フランス)



カヴァレリ・カルテット
(イギリス)



カルテット・ゲアハルト
(スイス)



カルテット・ソレイユ
(日本)



ヤナ弦楽四重奏団
(日本)



ラガッツェ・カルテット
(オランダ)

第2部門《ピアノ三重奏・四重奏》(11団体)



アルク・トリオ
(日本)



東京スカイ・トリオ
(日本)



トリオ・アタナソフ
(フランス)



トリオ・アドルノ
(ドイツ)



トリオ・エネスコ
(ドイツ)



トリオ・スヤーナ
(ドイツ)



トリオ・ラファール
(スイス)



メデア・トリオ
(スイス)



ストラトス・カルテット
(オーストリア)



ノトス・カルテット
(ドイツ)



フレックス・アンサンブル
(ドイツ)

第8回 「大阪国際室内楽フェスタ」 出場グループ

第8回「大阪国際室内楽フェスタ」に、世界24カ国から103団体の応募があり、事前審査の結果10カ国から21団体が参加します。

Bグループ (10団体)



カリヨン
(デンマーク)《木管五重奏》



コトアルト
(日本)《二十五絃箏(箏)・ヴィオラ》



ザ・スタセヴスキー・ブラザーズ
(フィンランド)《ピアノ・チェロ》



ストリングス・アンド・キーズ
(ロシア)《ピアノ・バラライカ》



ソコ・デュオ
(ドイツ)《ピアノデュオ》



打楽器集団「男群」
(日本)《パーカッション六重奏》



ダス・クライネ・ヴィーン・トリオ
(オーストリア)《ピアノ・ヴァイオリン》



デュオ・カリブソ
(フランス)《ピアノ・サクソフォン》



ドラマティカ
(スロベニア)《パーカッションデュオ》



トリオ・バラフレーズ
(ロシア)《ドムラ・バラライカ・ポタンアコーディオン》

Aグループ (11団体)



アンサンブル・リュネット
(日本)《フルート四重奏》



カコ・エ・タツソ
(日本)《ピアノデュオ・パーカッション》



カリス
(韓国)《ピアノ五重奏》



クアルテット・サンフランシスコ
(アメリカ)《弦楽四重奏》



ザ・ロシアン・トリオ
(アメリカ)《ピアノ三重奏》



シバライト・ファイブ
(アメリカ)《弦楽五重奏》



アンサンブル・ディーヴォ
(ロシア)《ドムラ・バラライカ・ポタンアコーディオン
コントラバス・パーカッション》



デュオ・ゲラシメス
(ドイツ)《ピアノ・パーカッション》



ドナルド・シンタ・クアルテット
(アメリカ)《サクソフォン四重奏》



バルカダ・クアルテット
(アメリカ)《サクソフォン四重奏》



ペトロ・デュエット
(ロシア)《ピアノデュオ》

第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の広報活動 (大阪チェンバーミュージックホライズン)

1993年の第1回大会以降3年毎に開催し、着実に成長してきました「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」。日本で唯一の室内楽コンクールとして、室内楽の一層の振興を図るため、これまでアウトリーチやレクチャーコンサートなど様々なコンクール関連事業を行ってきました。第1回大会以降20年を経過したのを機に更に多くの方々に室内楽の素晴らしさを知ってもらうため、コンクールと連動して室内楽振興のための様々な関連事業を行います。以下の事業を総称して「大阪チェンバーミュージック・ホライズン」とし、多様な形で展開いたします。

英語のホライズン(Horizon)は、地平線や水平線を意味しますが、この言葉は視界とか視野の範囲のことも言います。当コンクールでは、多くの人に室内楽の楽しさ、素晴らしさを知ってもらうために、水平線の彼方の遠くにいる音楽愛好家にも視界を広げ、室内楽の多様な魅力をお届けします。

(1)アウトリーチの実施(4月9日~23日)

前回大会の覇者、「アタッカ・カルテット」(アメリカ)と、日本で唯一の常設団体である弦楽四重奏団「カルテット・エクセルシオ」(第2回大会2位)により大阪府内の高校等に出向いて通常のコンサートとは異なり、親しみやすい曲を選び、室内楽ファンの拡大を図ります。

日程	会場	備考	演奏団体
4月9日(水)	北野病院	プラナホールで実施	アタッカ・カルテット
4月10日(木)	いずみホール	ランチタイム・コンサートと同様の形式で実施	
4月11日(金)	京都市内のホテル(予定)	ロビーコンサート	
4月20日(日)	大阪市福島区民センター	未就学児童を対象としたキッズコンサート	カルテット・エクセルシオ
4月21日(月)	大阪府立夕陽丘高校	ヴィオラホールで実施	
4月22日(火)	関西大倉高校	高校生を対象	
4月23日(水)	大阪芸術大学スカイキャンパス	幼稚園児を対象	



アタッカ・カルテット



カルテット・エクセルシオ

(2)ライブ・ストリーミングの実施(5月13日~21日)

現代は様々なイベントの生の映像と音声を容易に広く発信できる時代です。日本はもとより、遠くは海外にいる室内楽ファンにコンクール&フェスタの実況をライブで配信するため、大阪芸術大学の協力を得てストリーミングを実施します。是非当コンクールのサイト(<http://www.jcmf.or.jp>)に随時アクセスして、お楽しみ下さい。



(3)室内楽に関する特別講演(5月20日)



©東京オペラシティ 撮影:大窪道治

今回コンクールの本選で西村朗氏(写真)の弦楽四重奏曲が演奏されることとなりました。そのことが御縁となり、西村氏に『室内楽の魅力』をテーマに特別講演していただくことになりました(5月20日(火))。一見(一聴?)とつつきにくい室内楽ですが、持ち前の軽妙な語り口で、その隠れた魅力を思う存分お話していただきます。

(4)披露演奏会東京公演の実施(5月22日)

従来は、いずみホールでの披露演奏会で、コンクール&フェスタを終了しておりましたが、最大のマーケットである東京で、コンクール第1部門と第2部門の優勝団体のコンサートを開催し、本事業の最終とします。いずみホールでの披露演奏会の翌日サントリーホール・ブルーローズ(小ホール)で披露演奏会東京公演を開催します。



サントリーホール・ブルーローズ

「グランプリ・コンサート2013」を終えて トリオ「国境なきクラシック」

今回の演奏者は、第七回「大阪国際室内楽フェスタ」で聴衆の圧倒的な支持を受け、優勝したロシアのトリオ「国境なきクラシック」です。

彼らは2006年にロストフ・ナ・ドヌで結成され、メンバーは全員ロストフ州ラフマニノフ音

楽院を卒業しており、ロシア民族楽器のドムラニニとピアノのトリオで演奏するバッハ、メンデルスゾーン、チャイコフスキーといった交響曲作品を、編曲して演奏することに重きを置いています。

本で演奏する事が決定しています。グランプリ・コンサートでは前半がロシアの作曲家ポロディン、チャイコフスキーなどのクラシッ

今回の「グランプリ・コンサート2013」にご協賛頂いた各社、共催の日本テレビ系列各放送局、また各地ホールのご尽力に対して改めてお礼申し上げます。

「ふるさと」をロシアの作曲家に編曲を依頼し、日本とロシアの故郷それぞれをイメージさせるものに仕上げ、観客の感動を誘いました。



後、ロシアをはじめヨーロッパ各地でコンサートの出演依頼があり、「グランプリ・コンサート2013」終了後も、第六回「大阪国際室内楽フェスタ」でメヌーイン金賞を獲得したモスクワ・ヴァルテットとロシアでジョイントコンサートを行い大成功を収め、さらにドムラのアリオナ・サヴチェンコは、来年の秋に再び日

彼らに今回の日本での感想を聞いたところ、まずは各地でツアーを管理・運営して頂いた方々に感謝を述べておりました。特に各会場のピアノの状態が良く、大変驚いたようです。後は、やはり食べ物。ロシアでもよく日本食を食べているという三人は、ツアー中も好んで日本食を選んで食べているようでしたが、その中でもドムラのミハイル・サヴチェンコは、「日本料理が世界で最も独創的で美しい料理だ。」と話していました。



日時	公演名	会場
10月31日(木)	札幌	STVホール
11月2日(土)	熊本	益城町文化会館
4日(月)	広島	庄原市民会館
6日(水)	大分	別府大学大分キャンパス
8日(金)	鳥取	鳥取市文化ホール
10日(日)	東京	津田ホール
12日(火)	大阪	いずみホール
15日(金)	三重	三重県文化会館小ホール
18日(月)	金沢	石川県立音楽堂邦楽ホール
20日(水)	高岡	富山県高岡文化ホール



公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

三洋電機株式会社
住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社近畿大阪銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

野村証券株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

東洋紡績株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)



平成25年度 第2回理事会開催



理事会

平成25年度第2回理事会が、平成26年3月20日(木) ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の初めに秋山会長の挨拶があり、その後、越智理事長が議長となって平成26年度事業計画書及び収支予算書の承認と平成25年度臨時評議員会招集の件が審議され、可決承認されました。

会議の終わりに玉越事業プロデューサーから第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の概要についての説明がありました。

平成25年度 臨時評議員会開催



評議員会

平成25年度臨時評議員会が、平成26年3月28日(金) ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の冒頭、越智理事長の挨拶があり、その後、評議員の互選で村上仁志評議員を議長に選出して先の理事会で承認された平成26年度事業計画書及び収支予算書が審議され、可決承認されました。また評議員5名の選出についても可決承認されました。

会議の終わりに、梅本俊和音楽評議員からこのコンクール&フェスタが大阪の地で生まれ、開催されてきたことの意義と間もなく始まるコンクール&フェスタへの期待の高まりを述べる挨拶がありました。

なお、新たに選出された評議員は次の方々です。

- 評議員 秀高 誠 (大林組)
伊勢 拓央 (西日本電信電話)
田路 耕一 (西日本旅客鉄道)
細山 雅利 (ニュー・オータニ)
向井 直人 (ハウス食品グループ本社) (敬称略、企業名50音順)

平成26年度助成金交付予定事業決定

平成26年度の助成金交付事業は1月27日(月)の選考委員会で厳正な審議を経て、申請総数16件のうち選考対象外を除く11件から5件が選考されました。

	事業名	申請者	開催地
1	岡本愛子室内楽シリーズNO.11 ~フランス近代のサロン音楽を集めて~	岡本 愛子	東京
2	直方谷尾美術館 第16・17・18回 室内楽定期演奏会	かんまーむじーくのおがた 渡辺 伸治	福岡
3	いわき室内楽協会コンサート 2014/2015	いわき室内楽協会 九里 孝雄	福島
4	ICEPミャンマー/日本 活動報告コンサート ~五嶋みどり & Young Artists~	NPO法人ミュージック・シェアリング 理事長 五嶋 みどり	東京 大阪
5	アン・ディムジーク愛媛 平成26年度第2回定期公演 「室内楽(オーボエ四重奏)の夕べ」	NPO法人アン・ディムジーク愛媛 福井 一恵	愛媛

- 〔選考委員〕 委員長 藤田 由之 (音楽評論家)
委員 青澤 隆明 (音楽評論家)
委員 根岸 一美 (同志社大学教授)
委員 三宅 幸夫 (慶應義塾大学名誉教授)
委員 横原 千史 (音楽評論家) (敬称略、委員名50音順)

C O N T E N T S

特別インタビュー 堤剛氏、井上道義氏大いに語る

インタビュー:日下部吉彦.....1

音楽文化をささえる

住友生命保険相互会社CSR推進室室長 濱本信樹.....7

音楽雑感

「三井の晩鐘」と琵琶法師

伊東信宏.....9

変化し続けるコンクール

~ポルドー弦楽四重奏コンクール2013~

渡辺和.....11

第8回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」

開催記者発表、開催要項.....13

コンクール審査委員.....14

出場グループ 第1部門.....15

出場グループ 第2部門.....16

出場グループ フェスタ部門.....17

広報活動.....19

「グランプリ・コンサート2013」を終えて

トリオ「国境なきクラシック」.....20

JCMF NEWS.....21

公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業.....22

表紙はグエル公園 バルセロナ(スペイン)

スケジュールを空っぽにして 癒やしを求め旅に出かけませんか？

都会の雑踏から離れ見知らぬ土地に立ち寄れば、
心解き放たれ満たされた自分に出会うことがあります。
追われたスケジュールを空っぽに、
ゆったりと流れる時間にその身を任せると
心癒やされ気分もリフレッシュされることでしょう。
JTBは、世界各地にちらばる癒しのスポットをご案内し、
旅のお手伝いをいたします。



JTB西日本 海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 (本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail zaidan@jcmf.or.jp